

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

各教科等における特徴的な指導の実践事例

1. 基本情報

都道府県名及び市町村名

鳥取県鳥取市

学校名

鳥取市立河原第一小学校

学校のURL

<http://cmsweb1.torikyo.ed.jp/kawahara-e/>

2. 学校紹介

学級数

【通常の学級】1・2年生：各2学級、3～6年生：各1学級【特別支援学級】2学級、【合計】10学級

児童生徒数

【全児童数】205人（平成23年11月8日現在）
（内訳：1年生33人、2年生36人、3年生33人、4年生31人、5年生37人、6年生35人）

学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

「かがやく子」：夢や希望を持って、主体的に自分の能力を高め、発揮できる子どもの育成。

【人権教育に関する目標】

- ・自分の人権を守り、他者の人権を守ろうとする意識・意欲・態度の育成
- ・人と人とのつながりを大切にしようとする子どもの育成
- ・本来持っている自分の力を最大限に発揮し、自己実現を図ろうとする子どもの育成

研究テーマ 絆を深め、かがやく河一の子どもたち

～伝え合い、つながり合い、高め合う仲間づくり～

「学習規律づくり」と「伝え合う活動（ペア学習）」を核とした国語・道徳の時間の学習

人権教育にかかる取組の全体概要

研究を推進していくために、研究仮説を立て、研究テーマについての考え方を以下のように共通理解して研究を進めた。特に、友達との学び合いにより考えを深め広げる「考えの再構成」に重点をおき、国語科、道徳の時間で身に付けた力を他教科等にも発展させ、課題を見付け、自分たちで取り組んでいく力の育成をめざした。

伝え合う力（自分の考えをしっかりと持ち、相手にわかりやすく伝えることができる。）

つながり合う力（友達のことを聞き、自分の考えを再構成できる。）

高め合う力（再構成したお互いの考えを全体に広げることができる。）

よりよく生きる力（課題を見つけて自分たちの生活をよりよくしていくことができる。）

研究仮説

人権教育を基盤として「学習規律づくり」と「伝え合う活動（ペア学習）」を核として授業改善を図ることにより、児童は学びの達成感をもち、お互いの良さを認め合い、自らつながり合い、互いに高め合う力を育成することができるであろう。

3. 特色ある実践事例の内容

「学習規律づくり」「伝え合う活動（ペア学習）」を核とした国語科・道徳の時間取組のねらい、目的

「学習規律づくり」と「伝え合う活動（ペア学習）」の2本柱に磨きをかけ、児童同士の「つながり合い」「高め合い」に重点をおき、人権教育を基盤として「すべての子どもに達成感をもたせる授業づくり」を目指す。また、目指す児童の姿、教師の授業力、共に前年度よりバージョンアップすることを常に念頭におき、本校流の授業の確立を目指す。

取組を始めたきっかけ

本校児童は、明るく素直で、決められたことには一生懸命取り組み、困っている友達にやさしく関わることができる。また、好きな活動や体験活動に積極的にに関わり、学校生活を楽しんでいる。しかし、自主的な学習には消極的で、自分に自信がなく自分で自分が好きになれない、善悪の判断が行動に結び付かない、進んで人と関わろうとする力が弱いなどの課題があり、様々な問題に向き合ってきた。そこで、児童相互の関わり、ふれ合い、高め合いということに重点を置き、相手を認めること、自分に自信が持てることをめざして「学習規律づくり」と「伝え合う活動（ペア学習）」を核とした「授業改善」に取り組むことにした。

取組の内容

ア 授業を変える ～すべての児童に学びの達成感を持たせる～

- ・発問の工夫（発問は基本的に1単位時間2つ。想像や考えが広げられる発問）
- ・意図的指名（共有に値する価値ある考えを意図的に指名。少数意見を取上げての揺さぶり）
- ・アナウンス（机間指導の際の指導者のつぶやき。考えがうまく書けない児童への支援）
- ・考えの再構成（自分に無かった友達の考え、気付いたことを赤ペンでメモ）
- ・評価言（学習意欲を喚起し、自尊感情を高めるために「褒め」を意識）

イ 研究を支える

- ・学習環境の整備（モデルになるノートの掲示等により、学ぶ意欲・興味・関心を高める。）
- ・児童の実態把握と分析（児童アンケート（5・9・12月）を実施し、結果を分析。）



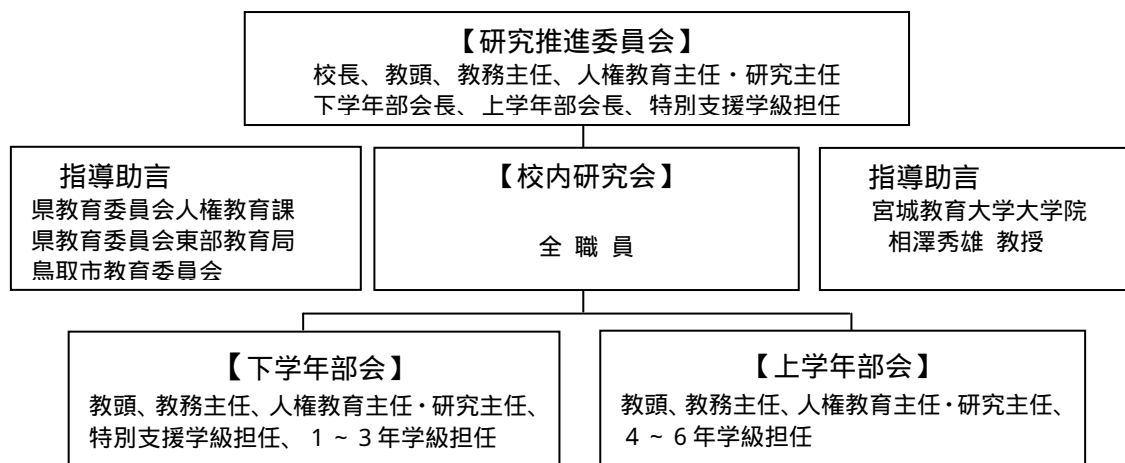
取組の頻度（平成23年度）

研究授業・研究協議会：6回

人権教育参観日：2回（内1回は自主研究発表会）

自主研究発表会：1回

取組の主体と実施体制



取組を実現するにあたって講じた工夫

課題のリレー

全職員の共通実践とするため、毎回の授業研究会で話し合いの視点を決めた。毎回、成果と課題を明らかにし、課題として残った点を次の授業研究会の視点としてつなげていった。全職員がその課題について実践し、次の研究会ではそれぞれの取組をもとに意見が言えるようにして研究を積み上げた。毎回の成果と課題は研究会後、校内研だよりも再度確認し、共通理解を図った。このことにより、全職員が同じ方向で共通実践でき、学校全体としての大きな力となった。



研究会でもペア学習

全員の意見を反映させるために、授業研究会では参加者もペア学習を行った。話し合いの視点を決めていたため、皆が視点をしばって主体的に授業を観るようになり、意見が活発に出るようになり、全員参加の授業研究会という意識が強まった。また、ペアも毎回相手を変え、多くの人と話ができるようにした。児童だけでなく、教師集団も互いの良さに気付くことができた。

事前研究会

教師の授業力を高めるために、事前研究会は皆で教材文を読むことから始めた。そして児童の考えを広げる主発問について全員で検討した。道徳では資料の扱い方についても検討した。

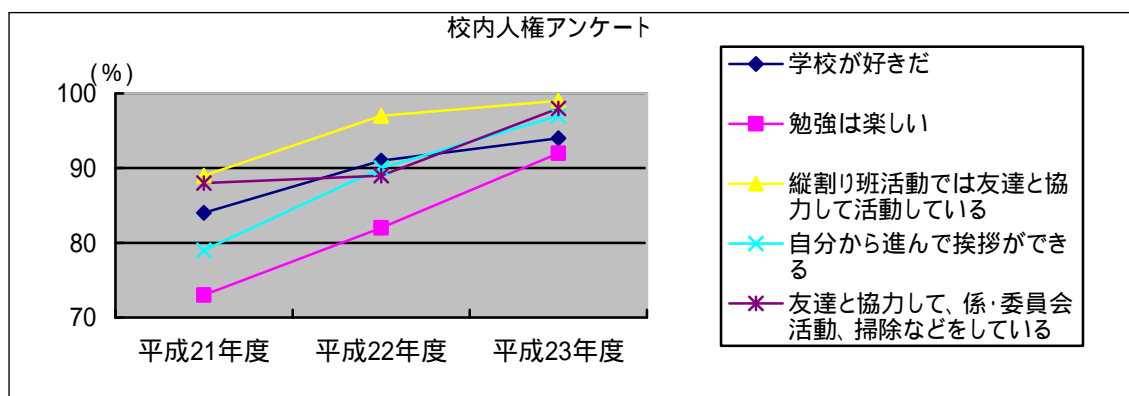
本年度は教師による模擬授業も行った。実際に発問をしてみる、児童の立場になって考えを書いてみることによってみえてくることもあり、授業に活かすことができた。皆で教材研究を行ったことにより、研究授業当日も主体的に授業を観ることができ、授業研究会での話し合いも活発になった。

交流授業

研究授業以外にも「交流授業週間」を設け、普段の授業を時間の許す範囲で互いに参観し合った。授業研究会だけではなく、日常の授業も研究の中心の場と考え、「伝え合い、つながり合い、高め合う仲間づくり」をめざして、「学習規律づくり」「伝え合う活動（ペア学習）」の2視点を意識した日々の授業づくりという共通理解に立って授業力の向上を積み上げることに努めた。

4. 実践事例の実績、実施による効果

取組の実績



取組が効果を上げた実際の事例

(児童の変容)

日頃の生活の中でも他学年の児童との関わりが増え、上学年児童が下学年児童を思いやる言動が多く見られるようになった。また、学年や学級の皆で活動したり遊んだりする場面が多く見られるようになり、何か問題が起こった時も話し合いによって解決しようとする姿が見られるようになった。友達へのやさしい言葉かけ、元気のいい挨拶が日常的に聞かれるようになった。

(教師の変容)

授業に対する取組の姿勢が大きく変わった。互いに意見や知恵を出し合い、皆が同じ方向で、本校の児童につけたい力を意識して共通実践ができるようになった。ねらいの達成について、児童のノートやその時間に活用した座席表をもとに自分の授業を振り返るようになり、児童の考えを深め広げるためのより良い発問、より効果的な意図的指名の方法を考えるようになった。また、児童への肯定的な評価や具体的な声かけが増え、児童を見る目が変わり、授業が、そして日々の指導が、人権教育そのものだという意識を持つようになった。

取組の実施から得られた知見・経験により改善を図った事項

道徳の時間の取組から

大主題構想

ひとつの内容項目について複数の週にわたって連続的に時間設定し、重点的に学習することによって児童の考えをより深めるという「大主題構想」に取組んだ。重点的な学習により、その価値項目が児童の心により深く刻まれ、道徳的实践力につながっていくものと考えた。

資料の発掘

ねらいに迫り、児童の実態に合った魅力的な資料を探すため、多くの資料にあたった。文学作品は道徳的価値の高いものがあるという視点から、国語科の教材文を資料化した実践にも取組んだ。

資料の再構成

資料はそのまま使うのではなく、児童の実態に即し、ねらいとする道徳的価値に応じて効果的に活用できるように再構成した。あえて挿絵は使わず、自己の生き方について言葉をしっかり吟味させ、考えさせる学習を目指した。児童に何を考えさせたいのか、どんな道徳的判断力を高めたいのかを明確にし、児童が資料を鏡として、それまでの自分のものの見方や考え方、判断の仕方を振り返り、考えを深めることができる資料づくりに努めた。

5. 実践事例についての評価

取組についての評価、及びそう評価する理由

児童はノートに自分の考えをしっかりと書くことができるようになった。書くことにより考えが深まることになり、ペアでの学びも深まるようになった。また、互いの存在を認め合うようになり、友達の良さに気付くことができるようになった。自分の考えがとりあげられることや、友達の前で自分の考えを発言する経験を積み重ねることで自信を持つようになり、教師の評価言もあいまって児童の自尊感情が高まってきた。



これらのことは、友達の発表をしっかりと聴こうとする態度や発表への意欲といった学習態度の変化が見て取れること、また、ノートの中に友達と共に学ぶ楽しさや、共に学ぶことで深まり広がった考えが綴られるようになったことからうかがうことができる。

波及的な効果として、参観日での保護者の参加数が多くなったこと、とりわけ、参観中の保護者の笑顔が増えたことがあげられる。また、学校公開日に、来訪する地域の方も多くなり、「児童がとても変わった」と意見を述べられる方が出てきた。これらのことから、人権教育での取組を通して、家庭や地域からの学校への信頼もより高まりつつあるものと感じられる。

現在、実施にあたって課題と感じていること

発問が洗練され、教科等の単元を通したねらいや毎時間の授業のねらいがしっかり達成されているが、発問に対する「予想される児童の反応」について、よりの確に見極めていく必要がある。これは、授業中での揺さぶりや問いかけをより効果的に行い、個々の児童の考えに対する評価をより明確にし、個々の考えをつないで授業を構造化していくために必要なことであり、このことを通して人権教育で児童に育てたい資質・能力を一層効果的に高めていくことができるものとする。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

鳥取市立河原第一小学校

各教科等における人権教育の在り方を探求した事例である。具体的には、国語科と道徳の時間の指導に重点をおきつつ、「学習規律づくり」と「伝え合う活動（ペア学習）」を核とした授業改善を目指している。目標は、児童各自が学びの達成感を得られるような指導により、児童が相互の良さを認め合い、高め合う力を獲得することであるが、全教員が課題の共通認識と意欲をもって授業変革と学習環境の整備に取り組み、成果を上げている。全教員が共通実践を行い、授業研究会、事例研究会、交流授業等を実施して授業改善を図る過程で、教員自身がペア学習を実践しつつ研鑽を深めた点が注目される。また、ひとつの価値項目について数週間にわたって連続的に時間設定をし、重点的に学習する「大主題構想」による道徳学習の実践、資料発掘と活用に努めた点も示唆に富んでいる。